

## 第2章 白磁・青磁・青白磁の分類概念

1. 关于中国的白瓷、青瓷、青白瓷的分类概念
2. 日本の白磁・青磁・青白磁の分類概念

本書のテーマである今帰仁タイプ・ビロースクタイプの磁器は、中国では青白磁に、日本では白磁に分類される。

これは、中国と日本の研究の経緯に根ざしている。

ここでは双方の認識の差を確認し、これをふまえて、それぞれを単に「今帰仁タイプ」・「ビロースクタイプ」とよぶことを原則とする。

## 关于中国的白瓷、青瓷、青白瓷的分类概念

栗 建安

福建博物院文物考古研究所

LI Jian an

The Archaeological Institute, Fujian Provincial Museum

关于瓷器的分类，通常是根据其外观的釉色，分为青瓷、白瓷、青白瓷以及黑釉瓷、绿釉瓷等等。其中：

白瓷，施无色透明釉，因其胎色白，故呈白色。

青瓷、青白瓷、黑釉瓷等，是将呈青、青白、黑色的透明或半透明、不透明的釉施于胎体、烧制而成的，因此即使胎体是白胎，外观仍呈青、青白、黑色。同时，由于釉中铁元素含量的变化，同一种釉色也会有深浅的不同。当然，因为是透明或半透明的釉，所以胎色的深浅也影响到瓷器外观的色调。

其他的颜色釉，也有透明釉和不透明釉（乳浊釉）的区分（如绿釉）。

福建地区宋元时期窑址，由于产地、原料、工艺技术等方面的种种区别，使其青瓷、白瓷、青白瓷产品在釉色方面呈现纷纭复杂的面貌，大致有白、乳白、青白、灰白、浅灰、青灰、青黄、青绿等以及其中各色的过渡色调。研究者们则通常根据自己的视觉来确定这些瓷器的分类，而没有一个色度的标准作为划分的依据。因此，有时会出现同一件瓷器在不同的研究者笔下，是不同的分类。一般来说，福建的研究者会将青黄、青灰、青绿等釉色归于青瓷，将青白、灰白、浅灰色等并入青白瓷，而将白、乳白色视为白瓷。但是，也有将青灰色釉划入青瓷类的；将灰白、浅灰色等并入白瓷。

关于这方面的问题，尤其是一些过渡色调一时不易判定的，应该从瓷系的归属（如青瓷系、青白瓷系）、工艺技术的系统（如龙泉窑系统、景德镇窑系统等）、纹饰群的内涵等几方面的综合来确定。

笔者的表述则是：将青黄、青灰、青绿等釉色归于青瓷；将白、乳白、灰白、浅灰色等均并入白瓷；青白色即为青白瓷。

在本研究报告中，中日双方的研究者将各自表述，暂不作统一的定义。

# 中国の白磁・青磁・青白磁の分類概念

栗建安

木下尚子（訳）

磁器は普通その釉薬の色によって、青磁・白磁・青白磁、黒釉磁・緑釉磁などに分けられる。白磁は、その胎土が白いために釉薬が無色透明でも白色をなす。青磁・青白磁・黒釉磁などは青・青白・黒色の透明あるいは半透明・不透明な釉薬を胎土にかけて焼き発色させたもので、胎土は白いが外見は青・青白・黒色をなす。また釉薬に含まれる鉄元素の量的な違いにより、同じ色の釉薬でも濃淡の変化がでる。これらは透明あるいは半透明の釉薬であるから、胎土の色調も磁器の色調に影響する。

このほかに、たとえば緑釉のように透明釉と透明釉（乳濁釉）に分けられるものもある。

福建地域の宋元期の窯跡は産地・原料・技術などからいくつかに区分され、その青磁・白磁・青白磁は釉薬の色によってさまざまな顔つきをみせ、白・乳白・青白・灰白・浅灰・青灰・青黄・青緑およびこれらの中間色をなす。研究者は通常それぞれの視覚的判断によってこれらを分類しており、共通の色彩基準があるわけではない。それで場合によっては、同一の磁器について異なる研究者がそれぞれに異なる分類をすることもおこる。一般に福建の研究者は、青黄・青灰・青緑などの釉色の磁器を青磁とみなし、青白・灰白・浅灰色などの釉色の磁器を青白磁、白・乳白色のものを白磁とみなしている。しかし青灰色の釉の磁器を青磁としたり、灰白色のものを白磁としたりする研究者もいる。

この問題、なかでも釉色が中間色の磁器をどう分類するかの判断は容易でない。これらは、たとえば青磁系・青白磁系などの磁器の系統や、竜泉窯系統・景德鎮系統といった技術系統、あるいは装飾内容などを考慮して総合的に判断すべきである。

筆者は、青黄・青灰・青緑などの釉色のものを青磁とし、白・乳白・浅灰などの釉色のものを白磁とし、青白色のものを青白磁と分類している。

本報告書では、中日双方は各自の基準に従い、あえてこれらの定義を統一しないことにする。